

氏名（本籍）	イ 李	サン 相	ヒョン 炫（大韓民国）
学位の種類	博士（文化財）		
学位記番号	博美第235号		
学位授与年月日	平成20年3月25日		
学位論文等題目	〈作品〉有機顔料の研究－朝鮮民画「紙織画屏風」の再現を中心として 〈論文〉有機顔料の研究－朝鮮時代における「紙織画屏風」の再現を中心として		
論文等審査委員			
（主査）	東京芸術大学	教授（美術学部）	宮廻正明
（論文第1副査）	〃	客員教授（〃）	有賀祥隆
（作品第1副査）	〃	教授（〃）	田淵俊夫
（副査）	〃	〃（〃）	稲葉政満

（論文内容の要旨）

朝鮮時代後期にあたる社会的な背景には、両班（朝鮮時代中期以降からの上流階級「士大夫」を示す）という身分秩序の崩壊により、長い伝統によるアカデミックな教育を受けた宮廷画家と民間の画家との画一化が進んだことが、民画の作品に質的な幅が広がる原因と考えられる。市民経済拡大に伴って、美術品の需要が急激に増えたことにより、安価である染料絵具、土系絵具のような身近に得られる色料が多数使用されたことも民画の特色である。

本研究の対象作品である「紙織画」は上記のような時代（朝鮮後期・17世紀後期）背景から制作された屏風絵で色料として有機顔料や、基底材として竹紙が用いられるなど特異な点が多々あり、絵画材料における研究の対象として、筆者は予てより着目をしてきた。そして平成15年に『紙織画』の修復の好機に恵まれた。

本作品は、民画に見られる材料的な特色に加え、脆弱な竹紙を細く裁断して織り上げて図様を表現しており、極めて珍しく興味深い作品である。有機顔料と竹紙の絵画材料の復元と、それらの材料を用いた模写による絵画技法の研究、現代は途絶えてしまった紙を織り上げて図様を表現する技法の復元という総合的な研究対象として『紙織画』の研究に着手することを思い至った。

「紙織画」には色料として有機顔料が、基底材として白い竹紙が使われたことが大きな特徴である。前者の有機顔料は染料から調製された絵具であり、古代から使用されており現存する作例は多いが、染料絵具の調製やその色調に関する文献記録は殆ど残っていないため、今日の染料絵具の再現研究や保存・修復に大きな課題を残している。一部の染料研究者による試みはあるものの、数色に限るものであり、染色家が見る観点が多く反映され、絵画に用いられる顔料としての評価は未だ明確になっていないのが現状である。本研究では天然原料から抽出した染液で有機顔料の復元製作を試み、染料絵具の堅牢度、基底材による発色の差異、絵具としての着色度、展色剤（膠）との馴染み、塗り加減の実験など絵具として有用性、実用性を検証する。

また、平成15年の『紙織画』の修理の際、補修紙作製における竹紙の諸問題が紙織画の再現に限らず、今の文化財保存・修復に大きな問題であることを再認識した。通常の竹紙や竹紙が用いられた作品の大半はある程度色がついているのが多いが、修理や模写制作に用いる紙は本紙より幾らか淡い色の紙が求められる。これは後補につける箇所は補修紙としてオリジナルとは区別させるためであり、また、再現用紙として使用される場合は制作者によって色を加えて行くからである。ところが、今現在市販されて

いる白い竹紙は染が難しく、ドーサの効きも悪い、色むらが付きやすいなどの難点があり、作品の色や風合い・厚みなどの条件を満たす竹紙を見つけ出すのは現在ほとんど不可能である。このような有機顔料を含む諸問題の解決は紙織画の再現や修復に止まらず、今後の古典絵画の復元研究や修復において意義のあることと考えた。

#### ・有機顔料の再現

『紙織画』には染料を沈澱させ色素を顔料化したものや、染料の色素を体質顔料に染着したレーキ顔料が多く使用されている。これは民画が発達する時代背景に起因し、朝鮮時代の絵画に有機顔料が使用された例が多数報告されている。有機顔料は制作段階で媒染剤や酸・アルカリ成分による色の変化が激しいことや経年変化・退色の傾向が高いため色相の定義づけが非常に困難である。更に保存修復の処置においても変色や色が動きやすいなどの難点がある。現在考えられる限りの天然染料から有機顔料を復元し、染料絵具の堅牢度（酸・アルカリ、光、水に対する堅牢度）、基底材による発色、着色性、接着剤との馴染み、塗り加減などの実証を行った。また、文献資料による判断に加え絵具としての有用性、実用性を打診し資料として体系的に収集する。更にそれらを用いて実際に模写制作を行うことは、今後の有機顔料の研究および、古典絵画の復元研究や、修復において一連の目安になると考える。

#### ・17-19世紀の白い竹紙の再現

『紙織画』の基底材である竹紙は、他の樹皮繊維による紙の復元と比較しても作業全体が非常に難しかった。平成15年の修理に当たって行われた紙質調査をもとに紙織画が制作された朝鮮中期にあたる中国の明代-清代の竹紙により近いと考えられる料紙作製を試みた。紙の強度、繊維の長さ、紙の地合い、漉き方などを変え、製紙科学専門家や和紙専門家の指導の元に試作を行った。竹紙が使われている古典絵画や文書は多いが、修復の際の補修紙は適当なものが現代では得られない。よって『紙織画』の基底材である竹紙の復元研究は他の竹紙を用いた文化財の再現や修復にも役立つと考える。

#### ・製作技法研究

『紙織画』に見られる、竹紙を細く裁断して織り上げて図様を表現する技法は、現在では行われていない。しかしながら類似する技法の作品が、少数ではあるが伝存することから、ある期間や時期に好まれた技法と考えられる。模写研究を通じて、技法の復元と、紙を織る技法が絵画表現として存在したことを再認識することは文化の継承において意義のあることと考える。

### 総 括

本研究では朝鮮後期（17世期）に制作された紙織画を通し、当時多く用いられていた有機顔料と竹紙の絵画材料の復元と、それらの材料を用いた模写により現代は途絶えてしまった紙を織り上げて図様を表現する技法の復元という絵画技法の総合的な研究を試みた。『紙織画』の再現に当たり、必然的に求められる絵画材料である有機顔料の有用性、実用性を検討し提示することは、今後の絵画材料研究および、古典絵画の復元研究や、修復においても有用と考える。

有機顔料の再現においては天然原料から抽出した染液で復元製作を試み、染料絵具の堅牢度、基底材による発色の差異、絵具としての着色度、展色剤（膠）との馴染み、塗り加減の実験など絵具としてそれぞれの絵具として有用性、実用性を明らかにした。特に基底材による色と光暴露した時の退色の度合いが色料によって異なり、下地にも大きく影響を受けることが明らかになった。この事実は古典絵画の復元制作や古典絵画の修復において大きく活用できると期待している。

染料絵具は高価な無機顔料の代用品として認識されていることが多いが、染料絵具は無機顔料にはない染料独特の色彩がある。つまり染料絵具と無機顔料には互いに超えられない色相の領域が存在するということであり、染料絵具は無機顔料の代用品ではなく、染料が持つ独特の色調が絵具として求められ

たのではないかと考えられる。また、製作毎に不安定と判断されがちな色相は、作り手の感性によって様々な色調が広げられる利点ととらえることもできる。さらに、染料は実際の描画に際して、筆からの下りもよく、濃度の調整も自在であり、絵具として大変優れた性質を持っているものも多かった。現在考えられる限りの天然染料から有機顔料を復元し、資料として体系的に収集した。

紙織画に用いられている竹紙は市販品で対応するものがなかったため、色が白くしなやかで薄くて丈夫な、糸目などの紙厚の変化の少ない竹紙の作製を試みた結果、中国連城の苦竹パルプを紗漉した紙であった。

一方、今回の研究を通し、竹の種類、採集時期、使用する部位、煮熟の度合い、漂白方法、叩解の度合いなど工程の違いにより様々な表情をもつ紙が出来ることも実証できた。

紙織画の再現については、本紙を断つ作業では正確な巾寸法とすると織り上がりの表情が単調になるため、1本1本の幅を微妙に変えて動きがある空間・風景を作った。また、緯糸の色味は明るいほど作品の彩色とのコントラストが生じ絵柄が見えにくくなり、硬さによっては緯糸と緯糸の間に隙間が生じ、作品の雰囲気を変える最も重要なポイントであることが分かった。さらに、制作において道具は形や材質などの解決のために色々な試作を繰り返した結果、緯糸を一本おきに起こす作業・緯糸を通す場合は竹材、詰め上げる作業には桧が最も適した素材であることが分かった。有機顔料と竹紙の絵画材料の復元と、それらの材料を用いた模写による絵画技法の研究、現代は途絶えてしまった紙を織り上げて図様を表現する技法の復元という総合的な研究が出来たと考える。

本作品は通常の民画と違って非常に限られた地域（場所）や階層より制作されたもので、制作に当たる時間や高度なスキルを要するもので制作方法としては刺繍や織物と同様に非常に手間がかかる工芸的絵画様式である。朝鮮絵画の中では紙織画の類似作品も存在し、これらは特定の織物の影響よりも多様な絵画の表現を平織の形状で転換させた民画の一種と考えられる。紙織画は、民画に見られる材料的な特色に加え、脆弱な竹紙を細く裁断して織り上げて図様を表現した極めて珍しい作品である。染料絵具や白い竹紙を用いた『紙織画』の再現研究を通じて、技法の復元や紙による多様な装飾文化・高度な絵画表現が存在したことを再認識した上で、再現できたことは文化の継承において非常に有意義であると考えられる。